



Title	鉄製武器の流通と初期国家形成
Author(s)	豊島, 直博
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58079
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【32】

氏 名	とよ しま なお ひろ 豊 島 直 博
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 7 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 2 月 15 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	鉄製武器の流通と初期国家形成
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 福 永 伸 哉 (副査) 教 授 武 田 佐 知 子 准 教 授 高 橋 照 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、弥生時代・古墳時代における鉄製武器の生産や流通の実態、さらにそれを用いた軍事組織のあり方を出土資料から検討することによって、中央政権の形成過程や地域掌握の進展状況を解明するとともに、人類学の「初期国家」概念をふまえて古墳時代社会

の国家形成史上の位置づけを展望した意欲作である。全体は2部6章の本論に序論と終論を加えて構成されており、分量は400字詰原稿用紙換算790枚、図表140点である。

研究の目的と方法を示した序論に続いて、第I部では詳細な資料観察に基づく鉄製武器の分類・編年・地域性などの基礎的研究を展開する。まず、第I部第1・2章では、弥生時代及び古墳時代前期の主要な鉄製武器である刀剣類について、とくに把や柄などの装具に着目して分析を行い、弥生時代の刀剣装具は木製、鹿角製など材質も多様で、形態も変化に富むのに対して、古墳時代前期には構造・形態・製作技法が画一化することを突き止めた。そして、この変化が古墳時代前期初頭（3世紀後葉）に生じることや、あらたな装具を取り付けた刀剣類が奈良盆地を中心に東北から九州まで分布することから、この時期に成立した中央政権によって刀剣類が各地に配布された可能性を指摘した。続く第3章では、韓国・中国の同時期の刀剣類をひろく観察し、刀剣の本体は日本と大陸で共通性が高いが、装具はそれぞれの地域で独自の発展を遂げることを明らかにした。このことから、製鉄がいまだ行われなかった古墳時代前期においては、刀剣本体を大陸から入手して一旦畿内地域で集積し、政権膝下の工房において装具を取り付けたうえで各地に搬出するという武器流通構造が形成されていたという重要な結論を導き出した。

第II部では、鉄製武器を手がかりにした軍事組織の復元、初期国家論の理論的検討をふまえた古墳時代社会の評価といった応用研究へと論を進める。第II部第1章では、古墳時代中期（4世紀後葉～5世紀）の刀剣類や鉄鏃を検討し、前代とは違って武器本体の製作から装具の取り付け、製品の配布までを一貫して中央政権が行うことによって、その軍事力掌握が飛躍的に高まったことを指摘するとともに、古墳に副葬された武器の種類や数量の分析から、この時期に地域の中小有力層まで含めた軍事編成が進展したことを明確に指摘した。古墳時代後期（6世紀）の資料を扱った第2章では、簡素な大刀や通常の鉄鏃には在地生産を、高度な技術を要する装飾付大刀や精巧な鉄鏃には畿内での一元的生産をそれぞれ推定し、列島内での製鉄の開始をうけて鉄製武器の総量が増大する中で、精製品の生産・流通管理を通じて政権による軍事力の掌握がいつそう進んだという理解を示した。

第II部第3章及び終論では、前章までの分析作業をふまえて、長期にわたる鉄製武器の生産・流通及び軍事編成のあり方を整理し、古墳時代前期にまず威信財としての性格を帯びた刀剣類の配布という形で政権による軍事力掌握の動きが始まり、ついで古墳時代中期以降には、武器そのものの掌握に加えて政権による軍事編成が各地で進行したことを指摘した。そして、軍事的要素に着目した国家形成論の先行研究を援用しながら、政権による武器の生産・流通管理の強化と、地域首長を介した列島規模での軍事編成を達成した古墳時代中期を初期国家段階の社会と結論づけた。

論文審査の結果の要旨

国家形成の過程において「軍事」という要素が大きな鍵を握っていたことは、多くの先行研究が明らかにしてきたとおりであり、とりわけ日本の弥生時代・古墳時代については、墳墓の副葬品として多くの武器資料が得られるために、それらを用いた膨大な研究成果がすでに蓄積されている。本論文は、そうした厚い研究史を持つテーマに果敢に挑み、武器資料の詳細な分析によってあらたな成果を見いだすだけでなく、たんなる遺物研究の域を越えて、日本の国家形成論研究にも重要な問題提起を行っている点で、高く評価できる。

考古学的な考察においては、把や鞘などの装具と刀剣本体の構造をそれぞれ別個に観察するというユニークな方法で、大陸から入手した刀剣本体に政権膝下の工房で装具を取り付けて完成させるという武器生産のあり方を明らかにしたことがとくに重要である。これにより、変化に富んだ刀剣類に装具の統一性が現れる古墳時代前期から、政権による生産・流通管理が強化される古墳時代中期をへて、精製武器の独占的な生産と配布によって軍事力を掌握した古墳時代後期にいたる変遷過程が合理的に理解できるようになった。また、京都府由良川中流域を対象として、古墳出土武器の組成から地域軍事編成の実態を復元した事例研究の手法も、良質のアプローチとして各地での類似研究を導くであろう。

ただ、本論文にも改善すべき点がないわけではない。武器そのものの研究を重視したために、墳墓や集落など古墳時代の他の側面への目配りがやや不十分になる傾向が見受けられるし、地域の軍事組織と中央政権との関係を証明する手続きにも、さらに厳密さが必要である。また、国家形成論への展望が意欲的であるだけに、その前提となる自身の初期国家概念の提示が明確さを欠いていた点も惜しまれる。

とはいえ、詳細かつ徹底的な資料の分析に基づいて鉄製武器の生産・流通のあらたな像を提示し、軍事編成の進展過程をふまえて列島の初期国家形成を展望した本論文は、研究史の到達点を大きく越える学術的価値を有していると評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。